

「誰が為に闘う」

— 2 稿 —

2026/08/16

山極 瞭一朗

〈人物表〉

澤田 雪菜 さわだ ゆきな	(18)	サッカー部主将
掛方 咲希 かけがた さき	(18)	雪菜の部活仲間
相木 桜 あいぎ さくら	(18)	雪菜の部活仲間
敷田 四郎 しきた しろう	(34)	雪菜の部活顧問
五十嵐 荒清 いがらし あらきよ	(42)	受験コンサルタント

1. 競技場・控室（昼）

サッカー部主将の澤田雪菜（18）を中心に、円陣を組んでいる。

その中に部員の掛方咲希（18）や相木桜（18）。顧問の敷田四郎（34）は壁に寄りかかり、彼女たちを見ている。

雪菜 「ここで勝てば、**全国**に上げれる」

雪菜、全員を見渡し、

雪菜 「みんな、絶対勝つよ」

全員で声を合わせ、

全員「One for All.All for One.」

2. 競技場・グラウンド（昼）

1万人は収容できる会場。満席状態の観客席は大歓声に包まれている。

『頑張れ、町高』と記された横断幕と『負けるな、相模高』の横断幕が対面に掲げられている。

サッカーの試合の真っ只中。

雪菜、桜からパスを受け取る。

町高のゼッケン。背番号は9。

巧みなドリブル捌きで敵チームをかわして進む。

観客席に帽子をまぶかに被った五十嵐荒清（42）の姿もある。

電光掲示板には町田高校と相模高校の得点。『3―

4』で町田高校がビハインド。

会場、雪菜コール。

雪菜、ドリブル速度を上げ、ゴールへ走る。

すると、雪菜の正面に相手チームの選手。

雪菜、ハッとしてぐくりと唾を吞む。

敵チームの選手はニヤリと笑う。

咲希の声「雪菜」

と、咲希の叫ぶ声。

雪菜、チラッと見る。

咲希が手を掲げて合図する。

目前にゴール。

雪菜、ズキズキと頭が痛み、顔を歪める。

× × ×

（フラッシュ・雪菜の妄想）

雪菜、咲希を無視し、ひとり突き進む。敵チームの選手を抜き去り、シュートを放つ。

ボールはゴールに一直線に飛んでいく。

× × ×

雪菜、雑念を振り払うように、ぶるつと頭を振る。鳴りやまぬ大歓声。

敵チームの選手が雪菜めがけ一直線に走って来る。

雪菜、頬を歪め、そして……

咲希にパスを出す。

会場は一気に静まり返る。

ボールは咲希に向かって飛んでいく。

だが、咲希に届く直前、敵チームの別の選手がボールを奪取する。

雪菜、思わずその場に立ち止まる。

試合終了のホイッスルが鳴る。

敵チームの選手たちは歓喜の声を上げる。

会場もどっと湧き上がる。

雪菜、果然としてその場に崩れ落ちる。

目の前にはゴールがある。

観客席の五十嵐、ふっと口角を上げる。立ち去る。

3.

競技場・裏門・外（夕）

雨が降っている。

雪菜、傘も差さずに、門から出てくる。

追いかけるように、咲希もやって来て、

咲希 「雪菜」

雪菜、ピタッと立ち止まる。振り返らずに、

雪菜 「……楽しかったね」

と、振り返り、笑う。

雪菜 「楽しい3年間だった」

だがその瞳は潤んでいて……

咲希 「ごめん。……ごめん、私のせいで」

雪菜 「……咲希のせいじゃない」

咲希 「だって私が——」

雪菜、遮って、

雪菜 「違う」

咲希 「雪菜……」

雪菜 「One for All. All for One.だよ。みんなが誰かの為に闘った。誰のせいとかないから」

咲希、何も言い返せず、頬を歪める。

雪菜 「またね、今日は先帰る」

と、早足で立ち去る。

咲希、その場で立ちつくす。

4. 高校・外観（昼）

年季の入った古びた校舎が建ち並ぶ。

5. 高校・体育館（昼）

受験コンサルタントの五十嵐、高3生たち相手に演説中。雪菜や咲希の姿もある。

雪菜は話を聴いていないようで、俯いている。

スクリーンに『受験の心得』と記されたスライドと『受験コンサルタント 五十嵐荒清』の文字。

五十嵐 「受験はよく団体戦と言われる」

雪菜、ふと顔をあげる。

五十嵐 「だがそんな言葉はまやかした。受験は個人戦でしかない。自分以外は全員敵だと思え」

雪菜に視線を向ける。

五十嵐 「One for All. All for One.なんて言葉があるが、それほど受験に似合わない言葉なんてないな」

視線を逸らし、全体を見渡して、

五十嵐 「いいか、高3の夏、どういう理由でこの時期から受験勉強を始めるのかわからんが、今からでも遅くはない」

雪菜はじっと五十嵐を見つめている。

五十嵐、校名板に寄りかかっている。

雪菜、門をくぐって出てくる。五十嵐に気付いて、

雪菜 「あっ……」

五十嵐、ニヤリと笑い、

五十嵐 「澤田雪菜」

雪菜 「どうして私を？」

五十嵐 「サッカーはもういいのか？」

雪菜、頬を歪めて、

雪菜 「なんで……」

五十嵐 「君のパスのせいで負けた」

雪菜 「……」

五十嵐 「訊きたいと思っていたんだ。どうしてあの場でパスを出した？ 素人目から見てもシュートを——」

雪菜、遮って、

雪菜 「仲間を、信じたんです」

五十嵐、鼻で笑い、

五十嵐 「自信がなかっただけだろ」

雪菜 「え？」

五十嵐 「君の欠点だ」

雪菜 「欠点？」

五十嵐 「君は誰の為に闘っていたんだ？」

雪菜 「仲間の為です」

五十嵐 「ではあのパスは正しかったと断言できるか？」

雪菜 「それは……」

五十嵐、雪菜に近づき、

五十嵐 「本心を言ってみろ。もう答えは出てるはずだ」

雪菜、五十嵐をじっと見つめる。そして本心がポツリとこぼれる。

雪菜 「……後悔」

五十嵐 「後悔？」

雪菜 「思っちゃったんです。どうしてパスを出したんだって」

五十嵐 「それで？」

雪菜 「あの時パスを出していなければ、点を取れていたかもしれない。いや、絶対シュート決めていました」

五十嵐 「私もそう思う」

雪菜 「え？」

五十嵐 「One for All.の呪縛に囚われていた君は優しすぎた。もっと自分の為に闘うべきだった。あの試合だけでなく、ずっとね」

雪菜 「……私のこと、知ってるんですか？」

五十嵐 「無論」

雪菜 「どうして？」

五十嵐 「澤田雪菜」

雪菜、すつと背筋を伸ばす。

五十嵐 「ミツの質問が多いな」

雪菜 「すみません……」

五十嵐 「それで、これからは自分の為に闘う覚悟はあるか？」

雪菜、拳を握りしめる。

雪菜 「もう、後悔したくないんです……」

五十嵐、満足そうに頷いて、

五十嵐 「いいだろう」

そして鞆から一枚の紙を出す。

五十嵐 「この学校に、東洋体育大学のサッカー推薦枠が1つあるのは知ってるな」

『スポーツ推薦 募集要項』の文字。

雪菜 「でもそれは咲希が……」

五十嵐 「奪うんだよ」

雪菜 「え？」

五十嵐 「ここからは個人戦だ。自分の為に闘え。もし、お前がまだサッカーを諦めていないのなら」

と、雪菜の返事も聴かずに歩き出す。

雪菜、ぎゅつと拳を握りしめ、五十嵐に続く。

柱の陰に咲希、じつと雪菜の背を見つめている。

雪菜、前を向いて歩いていく。

(終わり)